広島経済大学研究論集
第37巻第2号　2014年9月

世紀転換期の不安と嘆き
―― H. ジェームズの場合――

上　田　　みどり*

序

コスモポリタン作家，Henry James（1843–1916）は，1904年，21年ぶりにアメリカを訪れた。‘コスモポリタン’と称されるだけに，ジェームズの欧州とアメリカの往復は何度となく若い時代に行われているが，20年以上も経てのアメリカ訪問は，ジェームズに特段の驚きを与えたようである。

19世紀から20世紀へとアメリカ社会が怒涛のごとく移り変わる世紀の変貌を，ジェームズは，自身の目で確かめようとした。ヨーロッパを訪れるアメリカ人の言動を，あるいは，アメリカ社会の変貌についての情報を間接的に得るだけでは，いたたまれない気持ちであったのかもしれない。ジェームズが幼少の頃過ごした，オールドニューヨークやボストンといった東部の先進的発展を遂げた街が，経済優先社会構築の方向へと推し進められ，そこに住む人の心までをも変えてしまったのではないかと危惧し，新天地を求めて理想の地を建設していったはずの父祖の精神構造をくつがえすような事象が起きているという不安が，ジェームズの心にあったのではないだろうか。この拙論において，アメリカ東部育ちの精神性を持つコスモポリタン，H. ジェームズが，自分の目に映ったアメリカ社会の変貌をどのように捉えているのか，ジェームズ作品を証左しながら論考する。

* 広島経済大学経済学部教授

1.　19世紀アメリカ社会の動き概観

ジェームズが幼少時代から何度も大西洋を渡り両親に連れられてヨーロッパ生活を経験していることは皆が知るところである。そんな中で，ジェームズが成人する頃のアメリカ社会はどのように変貌をとげていったのか，まずは概観したいと思う。

1862年に大陸横断鉄道建設を定めた太平洋鉄道法 Pacific Railroad Act が成立し，経済においても，２月には国法銀行法（National Banking Act）が制定され，経済活動は活発になる。1863年１月１日には，奴隷解放宣言（Emancipation Proclamation）が発布となり，７月初めのゲティズバーグの戦闘で，南軍敗退し，11月19日にはリンカーンが有名なゲティズバーグ演説を行っている。12月８日にはこのリンカーンが再建計画を発表。1864年には，リンカーン大統領は連邦移民契約労働法（Federal Emigrant Contract Labor Act ）を制定し，移民促進の法律ができる。アメリカ大陸への移民は加速する。移民については後に触れることにする。その年11月８日には大統領選挙が行われ，リンカーンは再選となる。経済活動が活発になるのに並行し，労働力の安定のためか，アメリカ移民会社（American Emigrant CO.）が設立され，労働力の輸入が可能となる。1865年４月９日にリー将軍がグラント将軍に降伏し，ついに南北戦争終結という運びになる。しかしその５日後，リンカーン大統領が観劇中に暗殺されることになる。1867年ヴァンダビルト（Cornelius Vanderbilt）

によるニューヨークセントラル鉄道とハドソン川鉄道の合同である東部鉄道会社の合同が進み，1869年には大陸横断鉄道が完成するのである。1870年１月にロックフェラー（John D. Rockefeller）が，オハイオ・スタンダード石油会社をクリーヴランドに設立し，産業社会を推進する動力になったものと推察できる。1876年にはベルが電話を発明し，通信事業の始まりとなる[1)]。

ほぼ同時代の作家 Mark Twain（1835–1910）が自分自身の小説の題をとって「金メッキ時代」と呼ばれるようになる時代，彼の誕生５日前に，アメリカの代表的な百万長者で鉄鋼王となるアンドルー・カーネギーが生まれ，36年には悪辣な手腕で鉄道界を牛耳るジェイ・グールド，37年には金融王の J. P. モルガン，39年には石油王のジョン・D・ロックフェラーが生まれていることなど念頭に留めておくべきだ[2)] と，この時代の経済界の顕著な特徴を亀井俊介氏が指摘する。同時代の作家として，Twain もすでにこの時代思潮を先取っている。

2.　ニューイングランドとヨーロッパ社会風土を比較

このような時代の流れに沿って，1877年にジェームズは『アメリカ人』（*The American*）を出版し，翌年1878年には *“Daisy Miller”* を発表，そして『ヨーロッパ人』（*The Europeans*）を出版するという，アメリカ東部ニューイングランドを中心に生きてきたアメリカ人とヨーロッパ人の異なる文化の違いを，ジェームズは単に指摘するのではなく，ジェームズ自身の幼いころからの体験に裏付けられた思いを込めて提示することとなる。（この論文に取り上げる主な作品 *“Daisy Miller”* については後ほど詳しく述べることにする。）このことは，ジェームズにアメリカ人とヨーロッパ人の感受性を比較することや，異なる世界の特質をより鮮明に認識し，価値観に裏付けられた心の動きを捉え，作品に映し出したかったと思われる。当時のアメリカの活発な経済活動にはとりこまれているわけでもなく，直接関係がないであろう作家ジェームズだからこそ作品に取り上げられる側面がある。経済に影響されるジェームズの作品に登場する女性たちは，経済が生み出す社会の裏で，あるいは影にかくされた腐敗した社会に少なからず影響されるのである。これら女性たちは，表面上，上流社会と呼ばれる社会階級にいる者を扱うことが多かった。また，アメリカが，この国の物質主義的繁栄の最中にあり，正にその勢いがフランス，イギリスをしのぐ上昇気流の最中であった。ヨーロッパに比して深く長い文化の背景を持つわけではなく，旧社会の古いしきたりを拭い去り，新しい理念を掲げ，それに沿った社会に生きようとした新世界の人々の有り様が，時を経てジェームズに傍観者的立場のみに収まることのできない衝撃を与えた。彼の知る，これまでの古き良き時代のアメリカ社会にはない別の社会風土を彼に認識させたであろうと考えられる。特に，ジェームズが取り上げた比較的初期の作品，“Daisy Miller”（1878）は，旧世界での異質性を持つ新世界の人間を際立たせ，ジェームズの芸術的発露としての作品に著すことになる。

主人公デイジーは，ニューヨークから弟と母親に連れられて，スイスのヴェヴェーに来たばかりである。父親はニューヨークで金儲けに忙しく，この作品中に父親は実際には登場しない。デイジーの弟はこのヨーロッパを居心地悪いと正直に発言し，反対にデイジーはまだ見ぬ初めて体験するヨーロッパの地をかなり楽しんでいる様子なのである。従って，デイジーは，経験の少なさからそれまでの過去背負ってきたものの経験だとか，文化を体現するほどの重く深い過去は持っていない。ヨーロッパ社会を熟知するジェームズが提供する舞台では，アメリカ娘

の無垢で天真爛漫なデイジーを主人公にすることで，この作品における過去への深い思いとか愛着というものは初めは存在しないことになっている。ここに1860年秋から再びアメリカへ帰国したジェームズの深層心理が自伝の中で，次のように語っている。

「当時のニューポートは私たちの偉大な国の中でも驚くほどに唯一の適切な場所，つまり私たちのようにいかに薄められた程度でも祖国離脱という性質とそれが引き起こした効果に染まってしまっている者にとっては，唯一のうまくいく場所だった。離脱の効果というのは，ヨーロッパを経験したという事実のことである。もちろん祖国離脱には種々の原因があり得るのだが，実際はほとんどの場合ただ一つしかない。ただしそれがかなり無慈悲なものだったのだ。ヨーロッパ経験は容赦なく離脱をもたらすものであり，それには絶対的な治療法はないと（内心でこっそり感じられるだけではあったが）一般的にみなされていたと思う。にもかかわらず，ニューポートは比較的治療に役立つ場所として目立っていた。」[3)] ジェームズが20歳になる前に訪れた，ボストン近郊の保養地であり避暑地として知られるこの土地ニューポートは，アメリカ富裕層のいわばマンションと言われる豪邸が立ち並ぶ場所である。ジェームズは当時心身共にここで癒されていたことが窺われる。そしてこの有閑という状態にあって，ジェームズは家の長が実業についていないことを屈辱的に感じていて，ここでもジェームズが経済活動とは無縁であることが認識される。

ジェームズにとって，穏やかな懐かしい Old New York の世界とは違う，拝金主義のアメリカ消費社会を背景に，また，物質主義に型どられた優美に輝いて見える見せかけの世界は，その半世紀あとに続く S. Fitzgerald（1896–1940）の作品でも明らかにされる。ジェームズとフィッツジェラルドはおよそ半世紀ほどの年齢差がある。二人が重なる時期は20年程あるが，時代はひたひたと流れ，後に S. フィッツジェラルドが追い求めたようなアメリカンドリームの世界や次から次へと増え続ける移民のダイナミズムの予感を，ジェームズは穏やかな気持ちで傍観者としての立場を保つことは難しかったかもしれない。比較的初期の作品，‘デイジーミラー’で，デイジーというアメリカ娘を典型的アメリカ人の一方の軸として登場させることにより，深く重い過去を背負わない一人の自由奔放な若いアメリカ娘が，これからどんな体験を積もうとしているのか読者に期待を持たせるものでもある。

2009年の「アメリカ学会」7月の会報表紙のコラムで田中久男氏が「過去」の概念についてのアメリカ人の国民的な心性の表明として，それを次のように指摘する。フィッツジェラルドの作品 *The Great Gastsy*（1925）の中で，語り手ニック・キャラウエイと主人公ギャッツビーとの会話中，「……過去は繰り返せないんだよ」とニックが言う場面がある。数週間ギャッツビーと会わないで，ある日曜日の午後，ニックはギャッツビーの家に出かけ，そこで，ギャッツビーがデイジーを知っているという事実を口にすることで，デイジーの夫トムの不審をかうことになる。そのような心情を持ちながらパーティを済ませた後のニックとギャッツビーの次の会話に注目する場面がある。

> “She didn’t like it,” he insisted. “She didn’t have a good time.” He was silent, and I guessed at his unutterable depression.……
>
> He broke off and began to walk up and down a desolate path of fruit rinds and discarded favors and crushed flowers. “I wouldn’t ask too much of her,” I ventured. “You can’t repeat the past.” “Can’t repeat

the past?" he cried incredulously. "Why of course you can!" He looked around him wildly, as if the past were lurking here in the shadow of his house, just out of reach of his hand.（TGG. p. 347）[4)]

ニックはパーティの雰囲気を嗅ぎ取り，古い価値観を肯定するニックに対して，ギャッツビーが過去を取り戻せるとする切り替えしの言葉は，ニックには到底肯定できないのである。"Why of course you can" と，ギャッツビーが切り返す場面があるように，「出直しはいつでも利く」とするギャッツビーに対して，ニックは全く反対の考えである。「過去をやり直せる」とする主人公の信念は，語り手ニックが「過去は取り戻せない」という考えと対峙しており，この時代から現代にもつながるアメリカ国民の心象の一面を言い当てている。これは，人生の可能性に対する好感度の感受性を示していることへの表れであろう。

かつてポーや N. ホーソーンも新世界アメリカには「過去」がないことを嘆いていたことが再び思い出される。長い歴史を持つヨーロッパには栄光の日々があったが，それと共に重い暗い過去があり，この国民的な心性の表明がアメリカ国民的感性の一部に刷り込まれていく過程のような気がする。その意味において，ニックにも似たジェームズのこの年齢に達した時期の心象と似ている。価値ある過去を大事にしたい気持ちと新しいこれから開ける未来への期待を同時に手にすることのむずかしさを心に秘めている。すでに地位も資産も持ち，社会を熟知したはずの者が，再出発の可能性を探る時期にあって，若い国であるアメリカにいてその感覚には，異なるさらなる展開が予想される。すでに社会的地位も資産も一定以上持つ者にとって，何もないところから出発する者と過去に対する認識は異なってくる。

作品中，デイジーという一人の若いアメリカ娘という設定であるからこそ，何の組織や制約に組み込まれてもいない，父親の庇護のもとにある女性だからこそ，自由奔放にヨーロッパ社会を楽しめるのだと解釈できる。

ジェームズは1860年秋から帰国，その後も繰り返し，ヨーロッパとアメリカを往復し，1881年10月には６年ぶりにアメリカに帰っている。翌年，母親の死に出会い，ロンドンに戻るのだが，またその翌年父の様態が悪化し，結局再びアメリカに渡ることとなる。この時期，たとえ狭量な心情を持つと言われるピューリタンたちであってもこの始祖が編み出し歩んだ理想国家へと築かれたアメリカという祖国の抗しがたい社会変化の一つの方向性に黙っておれないジェームズの心の一面を作品に著すことになったのだろう。

3.　アメリカ娘の意義

ジェームズの作品に多く登場するヒロインであるアメリカ娘の振る舞いは無知のためか，本質的に無垢なのかについて，私たちに課題を提供する。アメリカの男性たちに対抗する女性たちの自由奔放な生き方の裏にあるものは我々読者を魅了するとともに，ジェームズの生み出すアメリカ娘は，典型的傍若無人のアメリカ型といえる女性像を感じさせるものでもある。これはどのように生成されるものだろうか。周りの無教養な環境から生まれる自由奔放な他者の行動を見てのことというわけでもなく，あるいは計算されたものというわけでもない。だからこそ，ヨーロッパに住む女性たちには見られない，ヨーロッパに長く滞在するアメリカ男性 Winterbourne を魅了するのである。

この作品の冒頭，ヴェヴェーの街のホテルで，Winterbourne が，アメリカ娘デイジーに初めて出会った時の描写に，彼女のアメリカ娘の本質的特性があらわされている。

> The young lady meanwhile had drawn near. She was dressed in white muslin, with a hundred frills and flounces and knots of pale-coloured ribbon. She was bare-headed: but she balanced in her hand a large parasol, with a deep border of embroidery; and she was strikingly, admirably pretty. …… he saw that his glance was perfectly direct and unshrinking. It was not, however, what would have been called an immodest glance, for the young girl's eyes were singularly honest and fresh.
> (D. M. pp. 272–274)[5)]

主人公デイジーの美しさは，フリルやリボンで飾られた外見上のものからのみ表されるものではなく，健康で元気横溢し，気取りもなく，自然の立ち振る舞いは，長くヨーロッパにいる者にはめずらしく新鮮に思われる。特に最後の singularly honest and fresh という表現には成熟したヨーロッパ文化の中には見られない新鮮な響きをヒロイン，デイジーという未熟な女子に見出している。この価値は長く深い文化を味わったヨーロッパの女性には見られない新鮮なイメージを読者に与えることにもなる。彼女の弟のたわいもない会話から，彼女の背後には，現在 Schenectady[6)] というニューヨークの工業都市にいる金儲けに奔走している成金の父親がいるらしいことをウィンターボーンは知ることになる。

この時代の成金には娘を爵位のあるヨーロッパの男性に嫁がせる野心を持つものが多かった。おそらくそのことにより，自らが徐々に社会的に力をつけ，文化を醸成していく努力もなく，一機に世間で評判の階級に上昇していく，成金階層が貴族階級に仲間入りすることになる[7)]。デイジー自身は，そのような大人の背後の画策に気付いてはいないとしても，ウィンターボーンは，彼女のことを，'Miss Daisy Miller's place in the social scale was low.'（D. M. p. 281）と，叔母であるコステロ夫人のはっきりとした口ぶりから自分たちの階層とは違うことを気づかせている。その一つの理由が，デイジーの母親の従僕とデイジーの家族が，仲がよいということで示されるのである。つまり，従僕は使用人であり，使用人は使用人としての振る舞いが要求され，雇い主にはそれなりに使用人への対応が必要となる。仲間としての親しさはあるにしても，その親密さの距離加減が，使用人と雇用者の間に成立する。雇用者と一緒に食事をすることはありえないし，雇用者の前で使用人がたばこをふかしたりすることは，ヨーロッパ人である叔母の論理の中では許されることではない。少なくとも友達として扱うことはできないのである（D. M. p. 281）。

ここでいう雇用主はミラー夫人（デイジーの母）であり，従僕は使用人であるから，ここでヨーロッパの階級制度の実体が明らかにされる。使用人と雇用者の間での区別がこの階級社会では発生することになる。アメリカの成金階層が，長い間ヨーロッパ貴族階級に護られてきた制度を知らないという解釈と捉えられるかもしれない。しかし，上流社会の女性には社会的役割も性役割も比較的自由であるにも関わらず，ここでは制度の道徳律を越えた人間愛という根源的道徳性を体現する存在としてデイジーが描かれることを際立たせてもいる。

ウィンターボーンとのシヨンの城に遠足を試みたことが，デイジーの思い出としての過去ではあるが，その後すぐに登場人物みなが，ローマへと宿所を移すことになる。そのあとローマでの社交界で，デイジーが数人の持参金目当ての男性に取り巻かれていることを噂に聞く。自分の想像とはまるでちがう成り行きを耳にしながら，ウィンターボーンは悶々としている。その間知り合いで慎み深いアメリカ人の女性の動

向を確かめた。そこを訪れた時，彼はデイジーとの再会を果たすこととなる。最初ローマが気に入っている理由を ‘society’（社交界）のせいだと母親が言う。そしてデイジーがウィンターボーンに向って次のように言う。

> “And what is the evidence you have offered?” asked winterbourne, rather annoyed at Miss Miller’s want of appreciation of the zeal of an admirer who on his way down to Rome had stopped neither at Bologna nor at Florence, simply because of a certain sentimental impatience. He remembered that a cynical compatriot had once told him that American women—the pretty ones, and this gave a largeness to the axiom—were at once the most exacting in the world and the least endowed with a sense of indebtedness.
>
> “Why, you were awfully mean at Vevey,” said Daisy. “You wouldn’t do anything. You wouldn’t stay there when I asked you.” (D. M. p. 297)

ウィンターボーンにとっては，デイジーに会いたくてたまらないからボーローニャにもフローレンスにもよらないで直ちにローマに来たのに，デイジーの思いとかみ合わない場面である。ヴェヴェーでのふたりの関係が，それほど深くも長くもなく，気まずい関係でもなく，続いていたことを思わせる会話である。従ってそのあと，デイジーがピンチオへ散歩に出かけることに対して，周りの大人たちが極度に気を付けている ‘getting the fever’ に対する心配をよそにウィンターボーンを同伴することにする。良い天気で雑踏の中，ウィンターボーンにとっては心楽しいそぞろ歩きである。その間，デイジーの会話の中には，彼女が自分のこれから起こるべくして起こる出来事を次のように予言するのである。

> “We’ve got splendid rooms at the hotel; Eugenio says they’re the best rooms in Rome. We are going to stay all winter—if we don’t die of the fever: and I guess we'll stay then. It’s a great deal nicer than I thought; I thought it would be fearfully quiet; I was sure it would be awfully poky.…… The society’s extremely select. There are all kinds—English, and Germans, and Italians.　I think I like the English best. I like their style of conversation.　But there are some lovely Americans. I never say anything so hospitable. There’s something or other every day.……” (D. M. pp. 299–300)

彼女が意識しているのは，‘社交界’の存在であり，アメリカから来た娘にとって，ヨーロッパのこの社交界がどれほどの意味を持つのか，未だ知らない。あくまで社交界で人を数多く知り，各国の友人も増やし，ましてや人懐っこく暖かく迎えてくれる自国の人たちが増えてくるのは彼女にとってすばらしいことなのだ。個人と社会という関係が，規則や何かの制約によって自由にならないこともあるということを，デイジーの心にはまだ推し量ることはできない。社交界デヴューの日がまだ浅いからでもある。社交界という自分をこれから縛るかもしれない制度的社会がどれほどのものなのか無知なのである。それを知るまでには，しかし，彼女が熱病にかかるかもしれないという予見さえできない状況であり，冗談にして言い放っているのである。

ここで，二人は待っているイタリア人ジョヴァネリのところにたどり着く。その時のウィンターボーンの心のつぶやきは次のようなもの

であった。

> Mr. Giovanelli, who spoke English very cleverly—Winterbourne afterwards learned that he had practised the idiom upon a great many American heiresses—addressed he a great deal of very polite nonsense; he was extremely urbane, and the young American, who said nothing, reflected upon that profundity of Italian cleverness which enables, people to appear more gracious in proportion as they are more acutely disappointed.……(D. M. p. 301)

ここでウィンターボーンはジョヴァネリのことを自分なりの解釈で彼は紳士ではないと決めつける。そのことはしかしデイジーに返って反発を起こさせる。ウィンターボーンは，ここでこの娘が果たして自分の思うほどの上品な娘なのかどうかを見極めるべきと考え直す。そんな考えを思いめぐらしている時，公園の中を走る馬車の一台が，ウィンターボーンたちに近づいてきた。友人のウォーカー夫人であった。彼女は ‘crazy’ という言葉を使っている。彼女の思いは，この馬車にデイジーを乗せ，少しの間，30分位ふしだらなことは何も起こっていないと世間に見える行為を終えて家に連れて帰るというものであった。そしてこのような散歩は母親とするものであるとデイジーに教える。しかしそのような配慮は，彼女にとって「干渉される」と理解されるのである。

デイジーは，ウォーカー夫人の提案をきっぱり拒否した。母親と散歩をしないことがルール違反であり，自分の好む人と散歩をすることが世間の噂になるのであれば，自分がよしとする行動にでればよいのではないか，とするデイジーの態度は，この社交界の掟からすでにはみ出していることになる。社交界の制度（システム）に組み入れられない，あるいはそこに所属したくないことを自ら選ぶか，所属を排除されることになりうる行為であった。ウォーカー夫人は立腹するというよりもデイジーに憐れみを感じている。

そして，ウィンターボーンは，ウォーカー夫人に次のようにつぶやく。“I suspect, Mrs. Walker, that you and I have lived too long at Geneva!”（D. M. p. 305）と，つまり，二人ともアメリカからヨーローッパに来て，アメリカ人としての人のよさを理解できない程，長く住み過ぎたことを意識し嘆いてもいる。そのため社交界という有産階級の集合体の中での身の処し方を心得ている者にとって周りの目がどのようにデイジーを判断するかについて気を使いすぎているのである。それはアメリカで培った社会ルールとはちがう文化の空気を長い間吸ってきていて，ヨーロッパの社会ルールに従い，遂行しているのが当たり前となっていることに気付いているのである。このヨーロッパの社交界にすでに名を成している二人にとって，いまさらデイジーとわけのわからぬ身分の男性の二人が社交界のゴシップ種にされることをウォーカー夫人は避けさせようとする。しかしウィンターボーンにはそれはできないとする。何故なら無垢無欲なデイジーに魅力を感じているからなのである。しかし彼はできるだけデイジーをスキャンダルの餌食にならないように手助けをしようとする。丁度デイジーがジョヴァネリと出掛けて行った方向にウィンターボーンは後をおいかけるが，結局二人にその後ついて行くことはしなかった。

彼は，次の日，その次の日にもミラー夫人宅を訪れるが，デイジーに会えない。そしてやっと三日目にウォーカー夫人のパーティで，デイジーがジョヴァネリをお供に従えてやってくるのに出会う。ジョヴァネリは彼女にとって，

‘intimate friends’ なのである。これは friends 以上の関係を示す言葉ではあるが，デイジーが堂々と連れ歩く相手としてはふさわしくないとされる。彼の身分はヨーロッパ社交界において，肩書きのない人物であるから，社交界の皆に認められてはいないのだということを次の場面で明確にされる。

> “... And then she must seem to him wonderfully pretty and interesting. I rather doubt whether he dreams of marrying her. That must appear to him too impossible a piece of luck. He has nothing but his handsome face to offer, and there is a substantial Mr. Miller in that mysterious land of dollars. Giovanelli knows that he hasn’t a title to offer. If he were only a count or a marchese! He must wonder at his luck at the way they have taken him up.”（D. M. p. 312）

ここで ‘title to offer’ と言っているように，ジョヴァネリは，社会的に認められる肩書き，つまり伯爵とか侯爵という身分名がないのである。そのためにデイジーの存在を認めさせるに足る人物ではないことを周りの社交界は，新興成金の妻であるデイジーの母親に分からせようとするのであるが，母親に注意を促しても見当違いであろうと周りの者に思われている。そうなるとどのような境遇が待っているかというと，この社交界では，デイジーと彼女の母親は，客に呼ばれなくなったのだ。そのような世間の対応に対して，デイジーは，“They are only pretending to be shocked.” という具合に，周りは上辺だけ，けがらわしいといった風によそおっているだけなのだと解釈しているのである。つまり人はそれほど自分に注目しているわけではないと思っている。この彼女の考えは，個人が社会に所属する概念からかけ離れている。それは古いアメリカ建国時代の個人と社会の関係からかけ離れたスタンスで，自由を維持するために社会の一員である所属意識を取っ払った彼女なりの姿勢を示すものである。それは彼女なりの解釈である。噂話をするだけで彼女に何の親切な言葉もかけないのは，デイジーをとりまく社交界の面々が，彼女に無関心でよい方向へ指導してやろうなどという善意を見出だすことができないのだと解釈された。

それらの会話の後，デイジーが元気な最後の場面であるコロシュームへと場面が移って行く。ウィンターボーンがデイジーの後を追っているうちに，彼はイギリスロマン派詩人バイロンの詩を思う[8)]。彼のつぶやいたその詩というのは，次のようなものである。

> I do remember me, that in my youth,
> When I was wandering,--upon such a night
> I stood within the Coloseum’s wall,
> ‘Midst the chief relics of almighty Rome;
> The trees which grew along the broken arches
> Waved dark in the blue midnight, and the stars
> Shone through the rents of ruin; from afar
> The watch-dog bay’d beyond the Tiber; and
> More near from out the Caesars’ palace came
> The owl’s long cry, and, interruptedly,
> Of distant sentinels the fitful song
> Begun and died upon the gentle wind.[9)]

この古代ローマの遺跡にあって，その繁栄を極めた町もこのように壊れ残骸状態であっても，星は輝き地上を照らし，ローマ市をティベル川が貫流する。番犬の吠える声が遠く聞こえ，梟のなき声と共に番人の歩兵の断続的歌声が流れ，

優しい風にのって消えてゆく。彷徨い歩くマンフレッドのごとく，ウィンターボーンも路を歩きつつ，これからデイジーの行動に対して，指示するわけにもゆかない。彼の胸中にはどうにもならないこれらの精神的不安のままにコロシュームに佇む。そしてふと現実に返る。そこに佇んでいる場合ではないのである。ところがそこで，デイジーとその相手の二人の姿を中央の階段で見つけることになる。彼はある種の恐怖の震えとある種の安堵とを覚える。

ウィンターボーンはこの時点で意識の中では，デイジーへの恋慕の情が消えかかっている。彼が予想していたように，デイジーはマラリアという熱病にかかり，危険な状態になったことを知る。デイジーが病にかかりながらも，母親に自分が，「婚約はしていないこと」と「スイスの城に行ったことを覚えているか」をウィンターボーンにたずねてみてくれと頼む。しかし，ウィンターボーンにとっては，今やそんなことはどうでもよくなっている。やがてデイジーは亡くなり，ウィンターボーンにとってこの間のデイジーへの思慕は何を意味するのかを考えさせられる場面へと移る。

そして婚約したと人に誤解された相手のジョヴァネリと，ウィンターボーンの間で次のような会話が交わされる。

> “And the most innocent?” “The most innocent!” Winterbourne felt sore and angry. “Why the devil,” he asked, “did you take her to that fatal place?”（D. M. p. 321）

ウィンターボーンは危険と分かっていた場所にデイジーを連れて行ったジョヴァネリを叱責している。しかしそれを糸口にデイジーの本心を聞かされる。ウィンターボーンは自分がデイジーを理解できていなかったことを悔やむのである。なぜ理解できなかったのか？それについて，ウィンターボーンは「アメリカを長く離れていたから」と応えるのである。このことは，H. ジェームズのヨーロッパの最初の記憶がパリのヴァンドーム広場であると言っているのを始めとして，幼児期の記憶の奥底に「ヨーロッパがロマンチックな異国であるという観念が彼の心に初めて生まれた瞬間であるとさえ，おそらく言えなくはない」とする大津栄一郎氏の指摘通り[10]，ヨーロッパに対するジェームズの思いが，作品の基底にあると想定される。ジェームズが考える人間の奥底にある本然的感情と現実ではもしかしたらありえないような曖昧模糊としている人間の本質を，日常生活に映し出されるデイジーという短くも本質に迫る生き方を選んだアメリカ娘の中に見出している。

4.　アメリカ娘へ託すもの

そもそも H. ジェームズは，なぜ若いアメリカ女性をヒロインにすることにこだわるのだろうか。ジェームズは新興成金という部類の人たちの前にはだかる文化の壁に傍若無人にふるまう純真なアメリカ娘たちにある種憐憫さを感じ，彼らに対立感情を抱くわけではなく，幾ばくかの財力の重みも認めてはいるものの彼らに同化しているわけではないだろう。H. ジェームズの描くアメリカ娘は，何者にも邪魔されない自由を生きるという可能性を追い求めることに価値を見出そうとしている。ジェームズが，‘デイジーミラー’の後に描く『ある婦人の肖像』（1881）の主人公イザベラ・アーチャーの性格の一貫性にこだわるにしても，まずは自由に生きることが優先で，社会的役割を科せられるわけでもなく，自分の人生を「一個の芸術作品にすること」を目的としている[11]。男性が社会的地位や名声の中での制約を受けているのに反して，あくまで自由を尊びその心情に沿う形で生きてゆく。このことを，水田氏は，著書の中で，「H. ジェームズの女主人公―ジェームズの主要

作品の主人公はほとんど女である―は，制度を超越する高度の道徳性を備えている。制度内に確固たる地位を占め，機能的役割を果たすことがないので，制度的に決められる道徳律を越えた根源的な道徳性を体現することができるのである。……女主人公は制度に受身的にしか参加しないので，本来的無垢が損なわれる度合いが少ないが，それだけ＜根源悪＞には誘惑されやすい。制度悪と根源悪が深く結びついているジェームズの社会にあって，女性はその制度的曖昧性，受身性ゆえに，制度悪に対しては無垢を保ち，高い道徳性を持ちうるのである。……」と言う[12)]。デイジーがイタリア人の男性と共に誤解を招くような振る舞いをしたとしても単に自由を謳歌するのみで，社会の想像する邪悪で堕落した振る舞いに至ることは決してなかった。デイジーが熱病にかかり急に亡くなるので，イザベラほどの深みを増す人物にはなり得なかった。しかしこの道徳性は，ジェームズが祖母から受けたカトリック的愛情深い安定した生活の中から生まれた穏やかな精神性を持つことで，強制された偽善的宗教心とは異なるジェームズの深層心理の中に，確実に気高い精神性が裏付けられていたことを示すものでもあると思う。

しかしかつて N. ホーソーンが述べ，ジェームズも同じように考えた，ものごとの暗い面を見つめることによって成長をとげる‘幸運なる堕落’は見られない。デイジーの日常的生活に映し出されるのは陽の当たる側の部分のみを示すようでもある。まるで，神の至福に包まれ，信仰の揺らぐことのない世界に住んでいるようなのである。最終的に熱病による死へと決着をみる，人間の究極の影の部分は，ヒロイン，デイジーの死を持って，進行役のウィンターボーンが体験する。デイジーが快活に生活していた日光の陽ざしに照らされた明るい側面と，彼女の行動から，想像できる悪を犯しうる側面の，アンビヴァレントな領域が，この作品に強い効果を与え，この拮抗関係が作品に緊張感を与える。かつてホーソーンの考え方と同じようにジェームズが，心の領域を扱う時，万人は悪を犯しうる可能性をもつことをこの作品で肯定していることは確かである。この曖昧な心の領域の中で善と悪のどちらにも傾くことができるのである。ウィンターボーン自身は他人の生き様を冷静に超然と観察し共感を持ちながらも俗世間に同化することもなく，もう一方で，物語の語りの役目を持つとも考えられる。これはウィンターボーンの成長と愛，共感，憐みの本然的感情を体験させるものでもあった。彼は幾度となくデイジーに憐れみを感じ，惹かれる共感と反撥を覚えながらも絶えず好奇心を持ち，彼女の生き様を冷静に見る観察力を持ったのは，“I like her extremely.”（D. M. p. 305）と，ウォーカー夫人に明確に本心を言い放っていることからも窺える[13)]。真にウィンターボーンは穏やかなバランス感覚の持ち主なのである。

『デイジーミラー』では，ヨーロッパ在住のアメリカ人にとって，ヨーロッパ文化がいかに大きな重圧であるかを披瀝するように描かれる。彼らは自分たちもその文化から逸脱しない生活をするように，常に神経質になっている。逸脱しないように防衛するのが精いっぱいで，その文化に同化しているわけではない。このことを「アメリカ人のヨーロッパ文化への対応の仕方がそれぞれの立場により異なる状況を，物語を通して転回させ，提示している。それを追っていくと，……エマソンの均質的社会から，次第に多様化していく様子がうかがえる。なかでも目立つのが，南北戦争後の新興成金の存在である。……休息に進展した産業社会で，多くの場合独力で財を蓄えた人たちである。彼らが豊かな財力を背景に傍若無人に振る舞う様子は，ヨーロッパ人にとってのみならず，アメリカ人社会，特に作品中コステロ夫人のような元々上流社会の人々にとって，鼻持ちならないものになって

きたのであろう。しかし，彼らの勢いは止めようにも止められないほど大きなものになっていたものと思われる」と，藤野早苗氏は著書『ヘンリージェームズのアメリカ』の中で述べている[14)]。

結　　論

時代は landed elite（地主階級）が力を持つ経済から，世界資本主義経済へと移っていったと言われる，ブルジョア階級が徐々に世界を掌握する方向へと向かっていた。ジェームズはイギリスに滞在し，ヨーロッパを回り，後進資本主義国であったアメリカへと産業革命以降，経済の世界市場舞台が移りつつあることを感じている。例えば綿製品にしても，アメリカ南部で収穫される綿花としての原料は，イギリスでの綿工業中心として巻き込まれる。しかしそれは，イギリス国内で消費するのではなく，生産高の６～７割は海外に出る。つまり世界中をイギリス経済に巻き込むことを示し，世界的連関を形成しつつあった。1846年に穀物法が撤廃となったことは，自由貿易政策が確立されたことを意味する。1860年には英仏通商条約が結ばれ，後進資本主義国であるアメリカは工業化を着々進め低開発世界が，目指す相手は当時の先進国であるイギリスをはじめとするヨーロッパ以外にはない。こうした物質的利害は何を示すのか？物質面での自由貿易がなされているように見えても，これは最小の利益であり，人々は恒久平和とか精神的レベルでのモラルに関心が向く。自由貿易の原則は正しいと理念で認めるが，進んだ方から遅れた方が叩き潰されてしまう場合もある。世界経済は不均等に発展していく現実を感じる者もいる。ジェームズが，国籍を母国アメリカからイギリスに移したことは，それをいち早く見抜いたうえでのことであろう。コスモポリタン，H. ジェームズは，そうした異文化社会間を行き来する中で，それぞれ国の文化を背負う個人の内面の心理的動きをいち早く，‘Daisy Miller’ の作品にみごとに微細に描写するものである。物語として決して大きな展開はなく平板な筋立てだが，その一人一人の人物描写がすぐれた小説作法に従い描かれ，旧大陸と新大陸の対比がパラレルに進行しつつ，互いに人物に反映されつつ，世界経済と文化の重みを背景に優れた作品に仕上げている。

注

1）亀井俊介『講座　アメリカの文化　別巻１　総合アメリカ年表』（南雲堂，1971，1990）pp. 78–101. この中の事象を取り上げ裏付けた。

2）亀井俊介『マーク・トゥエインの世界』（南雲堂，1995）p. 36. 亀井氏がこのように時代を解説する。

3）市川美香子／水野尚之／舟阪洋子訳『ある青年の覚書・道半ば　ヘンリー・ジェイムズ自伝』第二巻，第三巻（大阪教育図書，2009）p. 57.

4）*The Great Gatzby* は次のテキストからの引用。*Great Books of the Western World 20th Century Imaginative Literature II* Clifton Fadiman, Philip W. Goetz, The University of Chicago, 1990. p. 347.

5）‘*Daisy Miller*’ のテキストは，*The Turn of the Screw and Other Short Fiction*（Bantam Classics edition, 1981）pp. 269–321 を使用した。‘*Daisy Miller*’ からの引用はすべてこの版からであり，引用に続けてカッコ内に D. M. とページ数を示す。

6）スケネクタディという町の名前が出てくるのは，おそらく，H. ジェームズ自身の父がアイルランドから1789年に移民してその後仕事で成功した場所として記憶に残るからだと考えられる。不動産業，銀行業，製塩などの仕事で成功物語を地で行き，エリー運河の開通式では式辞を述べ，スケネクタディのユニオン・カレッジの理事にもなったとある。作家ジェームズに残された遺産額は，史上ニューヨーク州で２番目だったと言われている。‘英語青年’ 研究社　1994.　４月号 p. 25.

7）ibid, 亀井俊介 p. 115. この中で，亀井氏は，『デイジー・ミラー』のヒロインはこれまた無垢で魅力的な少女に描かれてはいるけれども，こういう風潮を反映していると，指摘する。

8）“Manfred” という有名な詩をつぶやく。これはイギリスのロマン派詩人 Lord Byron（1788–1824）が1817年に発表した劇詩。

　Byron 自身1803年に Mary Anne Chaworth に結婚を申し込んで断られた経験，身辺多事で一旦結婚するが，別居永久にイギリスを去り，スイスからイタリアへ移り，ローマに居をかまえていた。彼の詩は粗雑なところがあるが，取材範囲が広く

勇ましい人物が多く，かつ異国情緒に富んでおり，ヨーロッパ各国に広く読まれ大陸のロマン主義運動に多大な影響を与えている。『英米文学辞典』研究社　pp. 183–184.

9）*Ibid. Manfred*, III. iv. 8–19. Byron の劇詩で1817年に出版。Manfred は機械な罪悪を犯し，悶々として世界を放浪しながら，神を罵り人を嘲る白眼孤独の人物。Alps 山中に精霊・魔女を呼び，忘却を求めて与えられず，しかも自殺も許されず，ついに予言の時が来て，昂然と反抗しながら悪魔の手に連れ去られる。Goethe の Fauste から暗示を受けた。p. 812.

10）‘英語青年’研究社（1994年４月号）p. 24.

11）『ヒロインからヒーローへ　女性の自我と表現』水田宗子（田畑書店，1982）p. 120.

12）Ibid, 水田宗子（田畑書店，1982）pp. 120–121.

13）このデイジーの印象は，ジェームズの従妹であるメアリー・テンプルのことを思いながら描いたのではないかと想像できる。24歳で亡くなったが，1860年代17歳頃にジェームズ家の人々は彼女に会っている。H. ジェームズ自身そのころの彼女は光輝くようだと記している。その魂は独創的で，活発，大胆，寛大で完璧な至福と言えるほどに「自然」だと褒め称えている。『ある青年の覚え書・道半ば―ヘンリージェームズ自伝』第二巻，第三巻　市川美香子／水野尚之／舟阪洋子（大阪教育図書，2009）p. 64.

14）『ヘンリージェームズのアメリカ』藤野早苗（彩流社，2004）pp. 75–76.

また，藤野氏は，アメリカ商業主義の嫌悪を表すと同時に，作品中登場する排他的自意識過剰の人物やピューリタン的偏狭性，自分の殻にこもりがちな偏見的姿勢を持つ人物を指摘するジェームズの姿勢を評価するものである。